

『古代アメリカ』13, 2010, pp.41–52

<調査速報>

アステカ王国拡大期における コヨルシャウキ女神の図像変化

井関睦美
(慶應義塾大学文学部)

1. はじめに

アステカ王国の基盤となったナワ（アステカ）文化は、現在のメキシコ中央高原を中心に、後古典期後期（c.1200–1521）に広くメソアメリカに影響を及ぼした。ナワ人の一部族であるメシーカ人は、1325年、現在のメキシコ・シティ中心部に相当するテスココ湖上の島に主都となるテノチティトランを建設し、主神殿テンプロ・マヨールを建立した。徐々に勢力を増したテノチティトランは、近隣の都市国家であるテスココ、トラコパンとともに、1428年に三都市同盟を結ぶことでアステカ王国の基礎を築き、1521年のスペイン人による征服まで繁栄を極めた（図1、図2）。

メシーカを中心としたナワ文化研究では、植民地時代初期に記録・編纂された絵文書を含む豊富な文献史料があり、図像、宗教、暦、民族史等が主要なテーマとなっている。しかし200年弱という短命な文化であったため、特定の文化要素の通時的変容を分析するような研究はあまり重視されていない。1978年から本格的に始動した、メキシコ国立人類学歴史学研究所によるテンプロ・マヨールの発掘調査は、このピラミッド型建造物が7回の神殿拡張（I期～VII期）を経ていることを明らかにしてきた（図3）。同時に、神々への奉納品（オフレンダ）を中心とする大量の遺物も出土している。しかし発掘データを、拡張段階ごとの文化的、政治経済的変遷を分析するためではなく、ナワ文化一般の其時

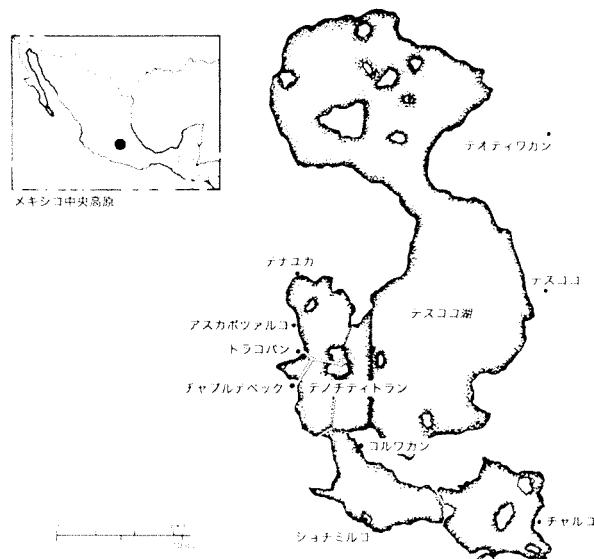


図1 メキシコ中央高原、テスココ湖周辺地図
(López Luján 2005: 44より引用・改編)

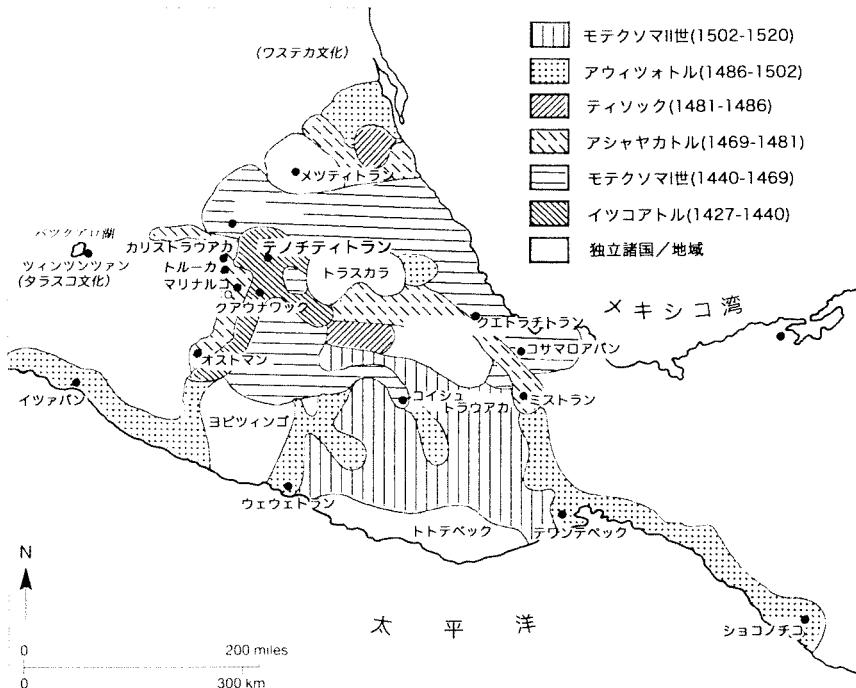


図2 アステカ王国支配領域の拡大 (Townsend 2009: 93 より引用・改編)

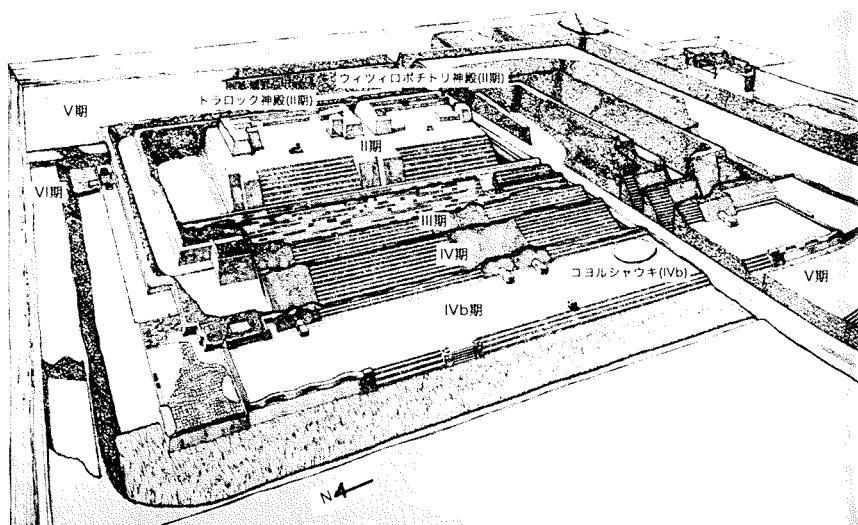


図3 テンプロ・マヨールの神殿拡張とコヨルシャウキ(IVb)の位置
(Townsend 2009: 152 より引用・改編)

的特性を抽出するために用いる方法論の方が有効であると主張されている [López Luján 2005: 92-95]。

本稿は、メシーカ民族史の中でも最も大きな社会変動期であり勢力拡大期でもある IV 期以降 (1440 年～) に、主神殿から出土している 3 つのコヨルシャウキ女神の彫像を事例として、図像の

変容と思想の関係に注目し、通時的な分析を試みるものである。第2章では、テンプロ・マヨールの構造と歴史を説明する。第3章では、コヨルシャウキにまつわる伝説や神話をまとめ、その図像表現の変化が、王国拡大期においてどのような意味や機能を持っていたのかを考察する。そして最後に、考古調査の現状をまとめ、考古学におけるアステカ王国史の通時的分析の可能性を提案する。

2. テンプロ・マヨールの神殿拡張と王朝史

テノチティランの都は、4つの区域と中心の祭祀地区に区分されており、これは伝統的なメソアメリカの五方位—東西南北と中心—を模している。この構図は一年の太陽の軌道を表し、その延長として世界全体を象徴すると解釈されている [Villa Rojas 1988: 127–134; López Luján 2005: 55]。祭祀地区の中央に西向きに位置する主神殿テンプロ・マヨールも、太陽の一年の運行に合わせて設計されており、春分と秋分の時期に頂上の2つの神殿の背後を太陽が昇るようデザインされていた [López Luján 2005: 55; Aveni 2006: 308]。太陽はナワ文化における主要な信仰対象でもあり、テンプロ・マヨールは物理的にも観念的にも世界の中心を体現していたため、王国拡大と共にその神話的・宗教的役割も複雑化していった。

テンプロ・マヨールの2つの神殿は、北側が雨の神トラロック、南側が戦いの神であり太陽の化身でもあるメシーカの守護神ウイツィロポチトリに捧げられていた（図4）。神殿の前では、それぞれの神に捧げられた儀礼が日々行われていた。トラロックは中央高原ではテオティワカンの時代から崇拜されていた古い神であり、守護神ウイツィロポチトリをトラロックと並列させることで、メ

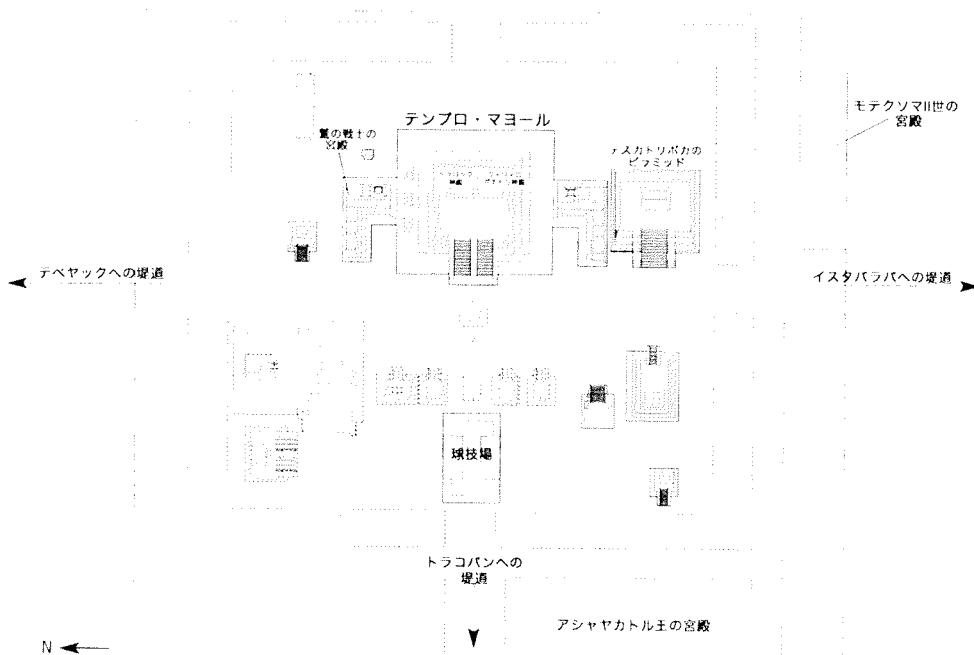


図4 テノチティラン祭祀地区 (Townsend 2009: 20 より引用・改編)

シーカ人は中央高原の高度な文化を引き継ぐ民族であることをアピールしていたと考えられる。

本章では、第1節でテンプロ・マヨールの拡張段階と各段階に対応する時期区分を説明し、第2節で王朝史の流れを王国拡大期に焦点を当ててまとめる。

2-1. テンプロ・マヨールの神殿拡張

神殿拡張とは、基本的には古いピラミッドを核として上から同じ形の建造物を覆いかぶせるように増築することを意味する。拡張段階は、I期からVII期に分けられ、主に神殿正面部のみの小規模な拡張は、II期に3回(IIa, IIb, IIc)、IV期に2回(IVa, IVb)確認されている[H. Hinojosa 1999; López Luján 2005: 43–52]。I期は地盤沈下によりすでに調査不可能なため、現在観察できる最も古い神殿部はII期に相当する。II期以降の頂上神殿部は全て植民地時代に破壊されており、四方の壁面や正面階段、基壇などが部分的に残存しているのみである。その中でも、IV期が最も残存率が高く、現在一番外側に見られる正面階段、装飾された壁面はこの期に属する(図3参照)。

テンプロ・マヨール自体の歴史が200年弱と短い上に、洪水が起こりやすい雨季には建設作業は適さないことを考慮すると、小規模なものも含めて12回という拡張の頻度は、主神殿がほぼ常に工事中であったことを想像させる[López Luján, et al. 2003: 155; F. Carrizosa and A. Barrera 私信 2010年8月]。この拡張頻度の高さの理由として、以下の2点が指摘されている[H. Hinojosa 1999]。第1は、アステカ王国主都の主神殿としての壯麗さとメシーカの偉大さをアピールする意図から、正面部分を中心とした増築が繰り返されたことである。そして第2の理由として、湖上の島という立地による地盤沈下と雨季の浸水や洪水によるダメージが挙げられる。とくにIV期以降は、ピラミッド自体の重量の増加に加え、大きな洪水の影響などから、補修を目的とした頻繁な増築が必要不可欠だったと考えられている。とりわけ増築が多く重量のかかった正面部分の沈下は速く、建造物としての均衡を維持するための修復工事も度々行われていた[López Luján 2005: 50–51]。

拡張を続ける主神殿は、増大するメシーカの支配力を物理的に誇示する存在であった。しかし同時に、神殿の拡張工事は、労働力と建築資材の確保という名目でさらなる征服の口実にもなっていた[Townsend 2009: 86]。主神殿を含む祭祀地区の建造物の建設事業については、植民地時代の文献史料にも多く記録されており、周辺諸都市からの資材と労働力の供給を頼りに行われていたことが分かっている[Durán 1984: Vol.II, 225–233]。必要とされた建築資材—テソントレ、バサルト、アンデシータといった火成岩や、堆積岩、石灰、砂、土砂、木材など—は、すべてテスココ湖や隣接する湖の周辺で獲得できるもので、カヌーという水上交通手段によって簡単に運搬できたため、このような頻度で大規模な建設工事が可能であったと考えられている[López Luján 2005: 157]。

テノチティランの王朝史では、1521年のスペイン人による征服まで、合計11人の王が即位しており、テンプロ・マヨールの拡張段階と王朝との対応表は図5のようになって

拡張段階(期)	年代	メシーカ王
I	AD 1325-1375	
II	AD 1375-1427	アカマビチュトリ、ウィツィリウイトル チマルボポカ
III	AD 1427-1440	イツコアトル
IVa	AD 1440-1459	モテクソマリ世
IVb	AD 1469-1481	アシャヤカトル
V	AD 1481-1486	ティソック
VI	AD 1486-1502	アウィツオトル
VII	AD 1502-1520	モテクソマリ世

図5 神殿拡張時期と対応するメシーカ王朝

いる。年代特定の根拠となっているのは、ウィツィロボチトリ神殿側の外壁に彫刻された暦を表す絵文字で、II期の「2のウサギ（1390年）」、III期の「4の葦（1431年）」、IV期の「1のウサギ（1454年）」、IVb期の「3の家（1469年）」の4つである。それぞれの年が含まれる王朝を、その拡張段階に対応させ、V期以降は「各期につき一人の王」という割合で振り当てている〔Matos Moctezuma 1988: 62–74; López Luján 2005: 52–54〕。

2-2. メシーカ王朝史

初代王アカマピチュトリから第3代チマルボボカまでの時代は、中央高原におけるテノチティランの地位を確立していく過程に相当する。拡張段階のIII期を築いた第4代イツコアトル王は、優れた戦士・指導者であり、この時代からテノチティランは勢力拡大期に入っていく。当時強大な王国であったアスカポツアルコとの関係が悪化していく中、テノチティランは、1428年に近隣都市国家であるテスココ、トラコバンと三都市同盟を結び（＝アステカ王国の成立）、アスカポツアルコに勝利する。勢いに乗ったアステカ王国は、中央高原のその他の都市国家も征服し、支配下に治めていった。

イツコアトルは、拡大していく王国の権力を正当化するため、民衆の意識改革をも目指した。占術や呪術が記された書物は人心を惑わすという理由から、多くの絵文書を焚書し、歴史を再編したという記録も残っている〔Sahagún 1953–81: Vol.10, 191〕。イツコアトルの死後即位したモテクソマI世も、その政策を引き継いだ。周辺諸国を制圧する軍事行動以外にも、ウィツィロボチトリへの継続的な生贊の確保という名目で、トラスカラなどの根強い敵対都市との儀礼的戦争を制度化した。神殿拡張記念や戦勝記念、または神々への奉納品として、大規模な石像彫刻を建造することにも尽力したと伝えられている〔Durán 1984: Vol.II, 211–239〕。民族史の編纂や儀礼的戦争による守護神の存在意義の強調、石像彫刻などによる王朝史のディスプレイは、メシーカの絶対的権力を周辺諸国へ知らしめるプロパガンダとしての効果もあったと考えられる。

第6代アシャヤカトル以降、スペイン人と接触することになる第9代モテクソマII世の時代にかけて、テノチティランを中心としたアステカ王国は急速にその勢力圏を拡大していった。スペイン人到来時には、王国の影響力はメキシコ湾から太平洋岸、そして北部中央メキシコからグアテマラにかけてのメソアメリカ文化圏ほぼすべての領域に及んでいた（図2参照）。

3. コヨルシャウキ像の変容と王国拡大の背景

テンブロ・マヨールの発掘調査において出土状況が記録されている遺物に、女神コヨルシャウキの彫像がある。コヨルシャウキ像は3つあり、それぞれIVa期、IVb期、V期以降に属すると考えられている。本章では、まずコヨルシャウキの登場する伝説と神話をまとめ、次に時期ごとに大きく異なるコヨルシャウキ像の図像分析をし、最後に図像の変化に影響した歴史的要因を分析する。

3-1. コヨルシャウキの伝説と神話

コヨルシャウキが登場する伝説や神話では、この女神自身は自然現象の化身や守護神というよりも、ウィツィロボチトリに対する反抗勢力の運命の体現者として描写されている。IVa期とIVb期

の南側の基壇には、体をバラバラに切断されたコヨルシャウキの彫像が据え置かれており、頂上のウィツィロポチトリ神殿で心臓を引き抜かれた生贋の体は、階段を転げ落ちた末に神官たちによってバラバラにされ、コヨルシャウキと同じ運命をたどった（図3参照）。

3-1-1. 伝説

メシーカの伝説は、故郷のアストランを出発してから約束の地であるテノチティランにたどり着くまでの、およそ200年間の放浪の旅を語っている。旅の途中、コアテベック（「ヘビの丘」の意）という地に到着した時、部族内に内部分裂が起き、この地に永住しようと主張するグループが現れた。そのグループの女性リーダーがコヨルシャウキであった。この決断に激怒したウィツィロポチトリは、見せしめとして、一夜のうちに離反グループとコヨルシャウキの心臓を引き抜いて食べてしまい、皆殺しにしてしまった。そしてこれが、ウィツィロポチトリに心臓を捧げる人身供犠の始まりだったと語られている〔Alvarado Tezozómoc 1992: 34-36; Durán 1984: Vol.II, 33-34〕。

3-1-2. 神話

この伝説には、神話的なバージョンもあり、そこではウィツィロポチトリの母として地母神コアトリクエが登場し、コヨルシャウキはコアトリクエの娘（ウィツィロポチトリの姉）となっている。ある日コアトリクエは、空から落ちてきた羽根の球を拾い、それを服にしまうことでウィツィロポチトリを身ごもってしまう。父親の分からぬ子供を妊娠した母を恥に思い、コヨルシャウキと兄弟たちは母殺しを決意する。その計画を知ったコアトリクエは、コアテベックへ逃れる。そしてコヨルシャウキをリーダーとした兄弟たちがコアテベックまで迫ってきたとき、満を持してウィツィロポチトリが完全武装した姿で生まれ出て、シウコアトル（「火のヘビ」の意）と呼ばれる矢で、コヨルシャウキの首を刎ねた。その頭部は山の上に留まつたが、体は山から転げ落ちてバラバラになってしまった。その後、ウィツィロポチトリは兄弟全員を追い回し、惨殺した〔Sahagún 1953-81: Bk 3, 1-5〕。

3-1-3. 伝説と神話の意味

この2つのコアテベックの物語は、メシーカに反抗する者たちの運命を象徴し、ウィツィロポチトリに捧げる心臓を抜き出す生贋の儀礼の起源を説明している〔Matos Moctezuma 1991: 20〕。テンプロ・マヨールのウィツィロポチトリ神殿側はコアテベックとみなされ、ウィツィロポチトリを祀る月には、主神殿を舞台にこの神話が儀礼として再現された〔Sahagún 1953-81: Bk 2, 141-50, 175-176〕。また、ウィツィロポチトリを太陽、コアトリクエを大地、コヨルシャウキを月、兄弟たちを夜空の星々と置き換え、日々のサイクル（太陽が月と星々を追い払い夜が明ける）を描写しているという、象徴的解釈に基づく説も広く受け入れられている〔León Portilla 1978: 24-5; Gillespie 1989: 86; Milbrath 1997〕。

さらに、最初に中央高原外への進出を成し遂げたモテクソマI世の誕生も、コアテベックの神話になぞらえて伝説化されている。第2代ウィツィリウィトルが肥沃な南部の都市国家クアウナワクの王女のもとに葦の矢を一本放ち、その矢に込められていたヒスイを王女が口にしたことで、モテクソマI世を懷妊したという〔Alvarado Tezozómoc 1992: 94-95〕。これは、コアトリクエが空から落

ちてきた羽根の球によってウィツィロポチトリを宿した神話と重複している [Gillespie 1989: 128–130]。この生誕伝説は、モテクソマI世とウィツィロポチトリを同一視しているだけではなく、メシーカ王の神格化を初めて表現した物語でもある。

3-2. テンプロ・マヨール出土のコヨルシャウキ像

メシーカ王の神性を高めるためにも、ウィツィロポチトリを祀る儀礼や関連する石像などは、神話的なモチーフによってさらに複雑化していくこととなる。その最も顕著な例が、反抗勢力の行く末を表現したコヨルシャウキ像である。以下に、3つのコヨルシャウキ像（①～③）を、伝説や神話と関連づけて分析していく。

3-2-1. コヨルシャウキ①

これはIVa期に相当するウィツィロポチトリ神殿側基壇の床面に、漆喰で彫刻された彫像で、1987年に発掘された [Matos Moctezuma 1991, López Luján 2010: 48–9]（図6）。この像は、東西146cm、南北203cmの範囲に彫刻された、胴体と四肢をバラバラにされた裸体の人物像である（図7）。頭部が欠けていることから、「頭部はコアテペックの頂上に残った」という神話を想起させるが、腕輪とサンダル以外の装身具を身につけていないことから、伝説に示されているように、敵対者としてのコヨルシャウキの末路を表現していると考えられる。

3-2-2. コヨルシャウキ②

これは円形の石板彫刻（直径304~325cm、厚さ30cm）で、1978年に完全に原型を留めた形で、①の真上に相当するIVb期から発掘されていた（図8）。頭部、胴体、四肢がバラバラにされたコヨルシャウキ像であるが、大地の神々に特有の属性（手足や腰に巻き付くヘビ、関節部の顔状装飾、腰に下げた頭蓋骨）や、生贊の象徴である頭部の羽根飾り、神々や戦士の装身具である鈴のついた腕輪、豊穣をもたらす貴重な液体として表現された血流など、神話的象徴性に満ちている [Cué, et al. 2010: 42–7]。また耳飾りは、ウィツィロポチトリの属性である太陽光またはシウコアトルを表すモチーフとなっており、この女神の神話的な敗北も表現されている。



図6 コヨルシャウキ①(IVa)と②(IVb)の位置
(Cué, et al. 2010: 43 より引用・改編)

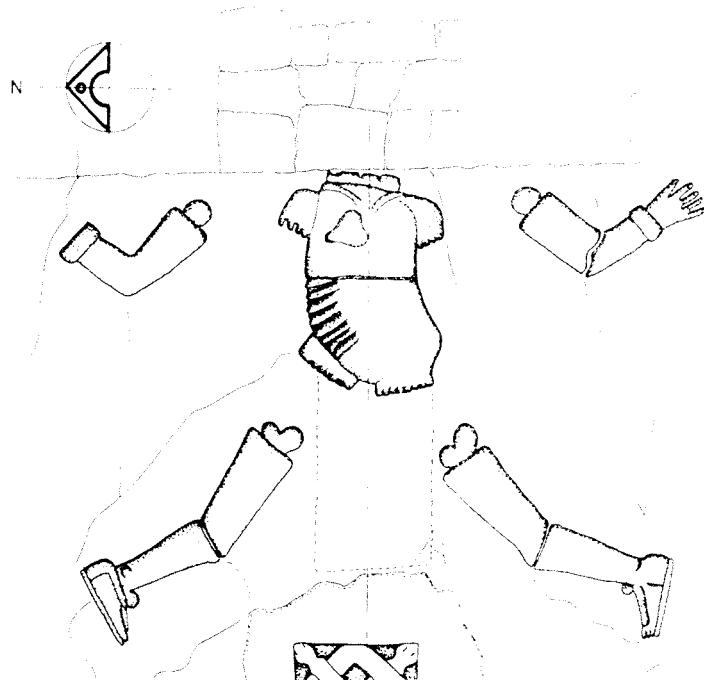


図 7 コヨルシャウキ①(IVa) (Matos Moctezuma 1991 より引用)

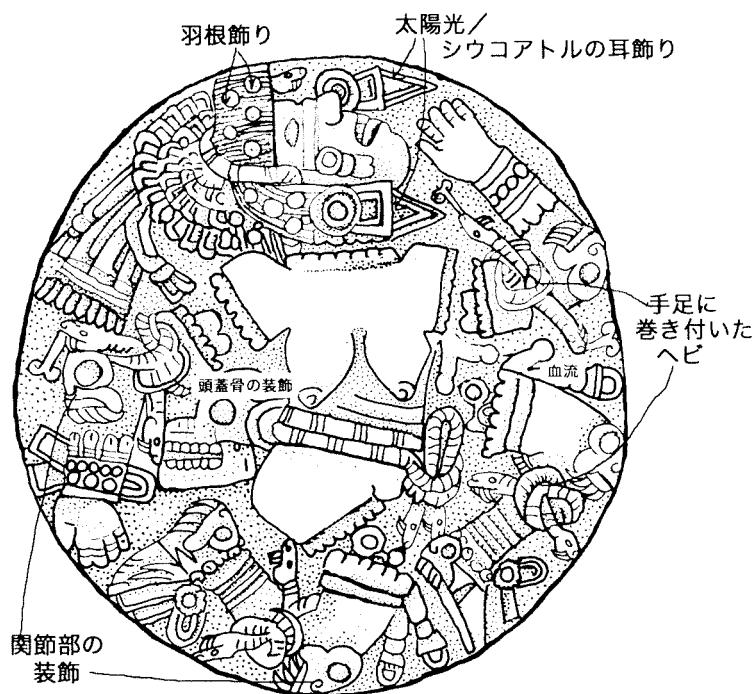


図 8 コヨルシャウキ②(IVb) (Matos Moctezuma 1991 より引用・改編)

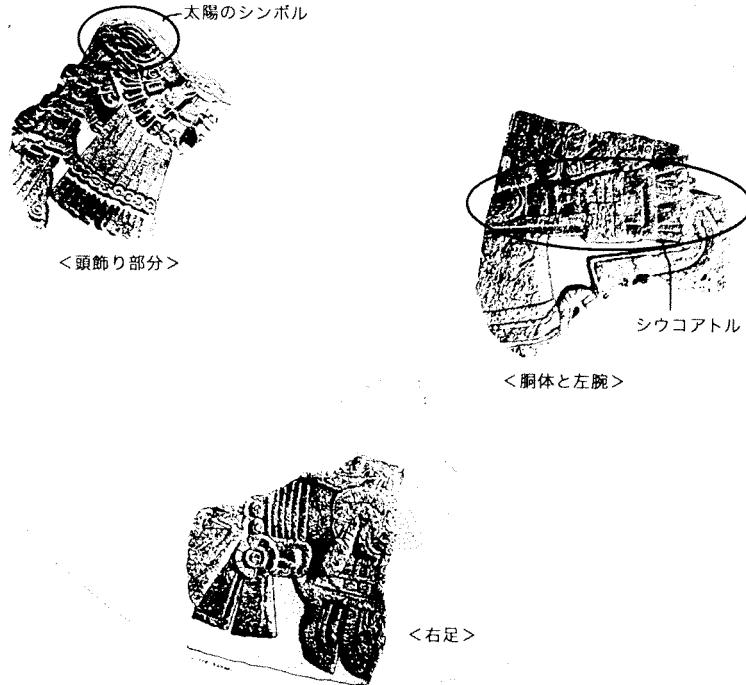


図 9 コヨルシャウキ③ (Matos Moctezuma 1991 より引用・改編)

3-2-3. コヨルシャウキ③

1980 年にウイツィロポチトリ側から出土し、V 期以降のものであると推測されているのが、この 4 つの石像彫刻の断片である (図 9)。これらの断片は、元々は②のように円盤彫刻を構成していたと考えられている [Matos Moctezuma 1991: 25-6; López Luján 2010: 50-1]。断片は、切断された右足 (107x99cm)、胴体と左腕 (134.5x129cm)、そして残り 2 片が頭飾り (141x99cm と 97x45cm) を表している (石板の厚さは 26.5~33.5cm)。基本的な図像要素は②と変わらないが、頭飾りは生贊のシンボルの他にも鈴や羽根の装飾が複雑になっており、太陽盤のモチーフも見られることから、太陽への生贊という象徴性を強く伺わせる。また、脇腹にシウコアトルが貫通している様子から、太陽神としてのウイツィロポチトリに対する敗北が強調されていることが観察できる。製作時期を推定している研究は無いが、第 8 代アウィツオトル (VI 期) がコヨルシャウキの石像彫刻を作らせたという記録があることから、これに関連するものかもしれない [cf. Durán 1984: Vol.II, 333]。

3-3. コヨルシャウキの図像変容の背景

①から②への図像の変化は、伝説から神話への移行を示唆している。①の装飾性の無いバラバラ死体は、明らかにメシーカのリーダーであるウイツィロポチトリによって見せしめとして殺害され

た反抗者の末路と見ることができる。しかし②は大地や豊穣のシンボルに満ちており、ウィツィロボチトリへの生贊の血が大地に実りをもたらすという、テンプロ・マヨールでの人身供犠が宗教儀礼として始まったことを推測させる。

また②と異なり、③は太陽のモチーフやシウコアトルをより詳細に描写しており、ウィツィロボチトリの太陽神としての属性を強調している。そのため、③の段階で、生贊を獲得する戦争が豊穣と太陽の運行を約束するという、創世神話を再現した宗教儀礼が確立したと考えられる。

ウィツィロボチトリは、その誕生神話でも語られているように、元来は戦いの神である。メシーカの戦いは、太陽のエネルギー源となる生贊（人間の心臓）の獲得を目的とした宗教儀礼の一つであり、継続的な生贊獲得の必要性が、実際には政治経済的な勢力拡大とも結びついていた。そのため王国の拡大に伴い、ウィツィロボチトリは太陽神としても崇拝されるようになっていく [Boone 1989: 1-4]。コヨルシャウキの図像の複雑化と、そのようなウィツィロボチトリの神格の変容は深く関連しているはずである。一方で、時間を遡り、①に見られる図像や技術の素朴さを考慮すると、III期以前の人身供犠には、太陽信仰的要素が欠如していた可能性もある。

ナワ文化は高度な石像彫刻を特徴とするが、①は漆喰製であり技術的に粗悪で表現様式が簡略な彫像であることも注目すべき点である。ここには、IV期の王国拡大期の社会情勢の中で、主神殿内の特に勝利の象徴とされる場所において、ウィツィロボチトリと太陽神を関連させた宗教的アピールが早急に必要とされた背景が伺える。その上、②に見られる明らかな技術的完成度の高さや図像の複雑化が、IVa期とIVb期という短期間に成されたということは、イツコアトルやモテクソマ一世の王国拡大路線の中で、宗教的意識改革が急速に進められたことを表していると考えられる。López Luján [2010: 50] は、IVb期以降も①と②が発見された同じ位置（ウィツィロボチトリ神殿側基壇）に、神話的象徴がさらに複雑化したコヨルシャウキ像が置かれていた、と推測している。

4. おわりに：王国の拡大と民族史の再編

神話と伝説の大きな違いは、時間性である。伝説は世界と人間が創造された後（神話時代の後）の物語であるため、より「現在」に近い歴史的出来事も含まれる [Bascom 1984: 9-10]。伝説は民族の起源や英雄の存在、王朝史、戦争での勝利などを語り、模範となる人物像、神々が期待する人間のあるべき姿を伝える。一方、神々による創世を物語る神話は、時間を超越したより根本的な世界の仕組みを描写する [Eliade 1963: 5-8]。つまり現在の人間が存在する理由、人間が世界の維持のためにすべき行いを説明し、現在の社会の仕組みを肯定するのである。神話で語られている物語は、ナワ文化の基本的思想を支え、都市や建造物の構造、宗教儀礼、政治・経済システムの背景となっている。しかし、神話や伝説は人間社会に対して常に絶対的な規制力を持つものではなく、社会や文化の変容とともにその内容や価値観も変化していく。

このような観点から、コアテベックのエピソードを、メシーカ人の伝説の一つにすぎなかった物語が、王国の拡大とともに、より普遍性の高い神話へと昇華された例と捉えることができるだろう。つまりウィツィロボチトリは、単なるメシーカの英雄的指導者という立場から、アステカ王国支配下諸国における共通の崇拝対象となり、王国の拡大と戦争の正当化を支える太陽信仰を体現する存在へと発展していったのである。そのような思想の変化を表現している物質文化の一つが、コヨル

シャウキ像である。

祭祀地区に関する研究は、共時的な象徴論や構造分析に偏りがちで、出土遺物の社会的、政治経済的、技術的側面の変遷についてはあまり注目されてこなかった。その要因は、200年足らずという短命なテノチティランの歴史と、神殿の残存状態が不均衡であるため拡張段階ごとの比較が困難であることがある。本稿では、文献史料と物質文化を照らし合わせ、様々なレベルの差異と変化に焦点を当てることで、文化変容の考古学的分析の一例を示した。近年、テノチティラン研究の進展により、主神殿出土のトルコ石や銅製品の技術的变化、生産拠点の主都への移動などが、この王国拡大期に当たる IVa 期と IVb 期の間に起こっていたことが明らかになってきている [cf. Schulze 2008; Melger 2009]。また、López Luján [2003: 159] が提案している、ピラミッドの建材や建築様式の変化などに焦点を当てた研究も始まっている（2010 年 8 月時点）。今後のアステカ考古学に、広く文明史研究に貢献できるような通時的研究の成果を期待できるだろう。

【謝辞】

本稿は、平成 21-25 年度科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：茨城大学、青山和夫）の成果の一部である。

引用文献

Alvarado Tezozómoc, F.

1992 *Crónica Mexicáyotl*, translated from Nahuatl by A. León, UNAM, Mexico.

Aveni, Anthony F.

2006 The Templo Mayor in Sacred Space, In *Arqueología e historia del Centro de México*, coordinated by L. López Luján, D. Carrasco, and L. Cué, pp. 305-15. INAH, Mexico.

Bascom, W.

1984 The Forms of Folklore: Prose Narratives. In *Sacred Narrative. Readings in the Theory of Myth*, edited by A. Dundes, pp. 5-29. University of California Press, Berkeley & Los Angeles.

Boone, E. H.

1989 *Incarnations of the Aztec Supernatural: The Image of Huitzilopochtli in Mexico and Europe*. Transactions of the American Philosophical Society, Vol. 79, Part 2. The American Philosophical Society, Philadelphia.

Cué, L., F. Carrizosa, and N. Valentín

2010 El monolito de Coyolxauhqui. Investigaciones recientes. *Arqueología Mexicana*, Vol. XVII, No. 102: 42-7.

Eliade, M.

1963 *Myth and Reality*, translated from French by W. R. Trask. Harper & Row, Prospect Heights, Illinois.

Gillespie, S. D.

1989 *The Aztec Kings. The Construction of Rulership in Mexica History*. The University of Arizona Press, Tucson & London.

- Hinojosa Hinojosa, J. F.
- 1999 Hundimiento del Centro Histórico de México-Tenochtitlan. In *Creación & Cultura. Revista Internacional de Arquitectura, Artes, Diseño*, Year 1, No. 2: 23-34.
- León-Portilla, M.
- 1978 *México-Tenochtitlan: Su espacio y tiempo sagrados*. INAH, Mexico.
- López Luján, L.
- 2005 *The Offerings of the Templo Mayor of Tenochtitlan (Revised Edition)*, translated by B. R. Ortiz de Montellano and T. Ortiz de Montellano, University of New Mexico Press, Albuquerque.
- 2010 *Las otras imágenes de Coyolxauhqui*. *Arqueología Mexicana*, Vol. XVII, No. 102: 48-54.
- López Luján, L., J. Torres, and A. Montúfar
- 2003 Los materiales constructivos del Templo Mayor de Tenochtitlan. *Estudios de Cultura Náhuatl* Vol. 34: 137-66.
- Matos Moctezuma, E.
- 1988 *The Great Temple of the Aztecs. Treasures of Tenochtitlan*, translated from Spanish by D. Heyden. Thames & Hudson, London.
- 1991 Las seis Coyolxauhqui: variaciones sobre un mismo tema. *Estudios de Cultura Náhuatl* Vol. 21: 15-31.
- Milbrath, S.
- 1997 Decapitated Lunar Goddesses in Aztec Art, Myth, and Ritual. *Ancient Mesoamerica* 8: 185-206
- Sahagún, B.
- 1953-81 *Florentine Codex*, translated by A. J. O. Anderson, and C. E. Dibble. 12 vols. Monographs of the School of American Research, Santa Fe.
- Townsend, R. F.
- 2009 *The Aztecs*. (Third Edition) Thames & Hudson, London.
- Villa Rojas, A.
- 1988 The Concept of Space and Time among the Contemporary Maya. In *Time and Reality in the Thought of the Maya*, by M. León-Portilla, pp. 113-59. University of Oklahoma Press, Norman.